



会報



THE ROTARY CLUB 鶴岡ロータリークラブ
OF TSURUOKA

齋藤得四郎氏絵

第682回例会 1972.12.12 (火) 雨 No.23

例会日 火曜日 12時30分
例会場 鶴岡市本町二丁目 ひ さ ご や
事務所 鶴岡市馬場町 商工会議所内
会長 阿部 襄 幹事 市川輝雄

Let's Take A New Look!

「もう一度 見直そう」

■出席報告

本日の出席

会 員	数	63名
出 席	数	44名
出 席	率	69.84%

前回の出席

前 回 出 席 率	77.78%
修 正 出 席 数	54名
確 定 出 席 率	85.71%

欠 席 者

阿宗君、阿部(公)君、阿部(襄)君、風間君

早坂(徳)君、平田君、海東君、黒谷君、
三浦君、岩網君、中山君、齋藤(栄)君、
齋藤(信)君、佐藤(昇)君、佐藤(伊)君、
篠原君、谷口君、佐々木君、津田君

■マークアップ

阿宗君一新庄RC
五十嵐(伊)君、嶺岸君、三井(賢)君、佐
藤(昇)君一鶴岡西RC

■ビジター

小林忠康君、佐藤拓君、阿部正男君
羽根田正吉君一鶴岡西RC

会報はご家族みんなで読みましょう

■ゲスト 戸川安章氏

■司会 鈴木副会長

■ロータリーソング 「我等の生業」

■会長報告 鈴木副会長

○去る12月8日恒例の歳末助合い運動に当クラブも協力のため会長並びに幹事で

市社会福祉協議会

七窪思恩園

NHK

の三ヶ所にスマイルボックスよりの掘金で夫々老万円づつ寄附金を持参し大変感謝されました。

■幹事報告

○会報到着

東京RC、村上RC、新発田RC

○例会変更

山形RC 12月20日 RM5時30分 丸久
クリスマス家族会のため

山形西RC 12月18日 PM6時
山形グランドホテル
クリスマス家族会のため

山形南RC 12月19日 PM5時 山交ビル
クリスマス家族会のため

山形北RC 12月21日を12月23日 PM5時
産業会館 クリスマス家族会のため

仁賀保RC 12月17日 PM3.00

○認証状伝達式予告 12月30日迄申込

369区備前ロータリークラブ 48年4月22日

県立備前高等学校

○第681回例会で1月2日の例会日の取扱について通常通り開催する旨の理事会決定を通告しましたが本日緊急理事会を開催し日本では1月1日から3日までは法定休日となっておりますので前回決議を取消して1月2日の例会は休むことにします。

▷川と庄内◁

スピーカー 戸川安章先生

本年度斎藤茂吉賞受賞

私達が小さい時に地理の時間におそわったものに、川というものは文化をはこぶ大きな役割をする。川の流域或は川と港の接衝点には大きな都会がひらけ、そこには、はなやかな文化がひらかれる。その例として大阪市

であるとか堺市だというふうにきえておりません。庄内地区の川の流域にはかなりたくさん
の村落や都会が形成されております。最上川
と日本海が接する酒田には昔から北廻船の寄
航などで非常に庄内地方に大きな文化をもた
らした酒田港があります。しかしながら川と
いうものが逆に文化をへだてる役割を果す面
もあることに案外気がつかないでございま
すが、その後川の流域について色々なことを調
査してござりますと川というものが上流と下流
との間の文化の交流には非常に大きな役割を
果していることは疑いないことですがたとい
どんな小さな川でも川が1本あると向う岸と
こちら岸の間では人の往来もはばまれたり、
当然に文化も大きいへだたりをもたらしてい
る場合があるということに色々な例で気がつ
いてまいりました。

例えば、これを最上川に例をとってみますと東西田川郡と飽海郡の関係であります、大体250年程酒井公が庄内においてになって以来一つの領土として同じ酒井藩政の中で繁栄を続けてきた地区でありながら文化的にみると色々ちがっている面があることに気がつくのであります。例えば言葉でありますが田川地区の言葉と飽海地区の言葉では単語そのものには変りないとしても言葉の調子—イントネーション—がかなり違っております。最上川の北の方一口に川北といいますが、川北の方に行きますとかなり秋田の方言に近いものがあるように考えられます。もう一つこの言葉はかなり元気があるといいますが、活発な言葉を使いますが田川地区の言葉は非常に情がこもっていると云いますか、人の感情にうたえる力が強いと云いますか、何んとなしに話しかけられていてその言葉の調子が非常にあたたかいと云う感じがするようであります。これは非常に卑近な例でありますがおぼこ節を歌っても田川地区でうたっているおぼこ節と酒田で歌っているおぼこ節はかなり「ふし」が違う面があったようであります。昔の民謡をききおぼえておりますとそういう点がどうして同じ庄内の中にありながら違うんだらうか、囃子ことばでも、田川地区はコバイチャと云い酒田はコバイテと云う。チャとテはたいした違いはないと考えられますがやはり言葉の成育を考えますとそう云う違いが出てくるには色々な生活上の相異があるんだなと云う感じがします。これを

非常に極端な例で申し上げますと、最上川の対岸に粕谷沢と云う部落があります。この部落に小さな川が流れております。川というよりも堰と云った方が良いかもしれませんが、その堰1本を境にして片方は最上郡に属し片方は飽海郡に属す。そして片方は酒井領であり、片方は新庄の戸沢領と云うことでこの2つの部落、たった1本の小さな堰でありながら人々の生活感情の上で非常に隔りがある。余り仲がシッカリしていないと云うふうに感じられるのです。

ではなせ川と云うものがそんな風に文化をおしへだてているのだろうか？ もう一つ近いを申し上げますと、かつては向酒田と云い酒田市がそちらにあったんだと云われている宮浦ですが、宮浦に行くと酒田と非常に違う生活面をもっている。現在の酒田は市街地になりましたし、宮浦の方は漁村的な傾向があると云う所からそう云う違いがくるかと簡単に考えてしまいますが、色々なものを探ぐって行くだけでもそれだけで解決のつかないものがあります。実は昭和37年に文部省で荘内地方30ヶ部落を対象にして毎日の生活についての調査を実施したことがあります。この調査で気付いたことは宮浦と云う所はあんなに酒田にも近いし、酒田との間に県営の渡船がひっきりなしに往復しておりますし人々の往復もはげしい。にも拘らず飽海郡的な傾向よりもむしろ田川地方的な傾向が強い。そしてもう一つはあんなに酒田に近い所にありながら非常に辺地的傾向をもっている。辺地的傾向と云うと妙なことですが、昔荘内地方の農家なんかで寝部屋に藁をひいてその上にムシロをおいて寝たと云う例がかなりあります。相当豊かな家でもそう云う寝室をもっていた家が非常にたくさんありました。所で37年の調査時に、やはり藁を寝室にしている家はまだ2〜3軒残っております。非常にモダンな家を新築した所で新しい寝具エバーソフですが、していた家がありました。が万年床の傾向を非常に強く残しております子供が寝小便なんかたれてもその上をボロでふいてすませると云うことを続けておりましたために買ってからわずか2年目と云うのにそれがゆかにコピリついてしまいこれを取りのぞくにもなかなかはがれない。スコップをもち出してやっとなんかといった現場に行き合いました。昭和37年の時点でもまだ古いものが残っ

ていた。ここから更に足をのばして黒森に行ってみましたら黒森にも2〜3軒藁をひいて寝室にしている家がありました。そう云う風にあそこは最上川の河口のもっとも広い所で昔から酒田と非常に深い関係をもっているが、そう云う市街地的な影響を余り受けていない。一体そういうふうな文化的な相異はどうして起ってくるのだろうか？ 色々これを考えてみるにこれは最上川の流域だけでなしに赤川の流域を考えても橋と云うものがなかったのが明治以後になってからで明治以前は最上川にも赤川にも橋はなかった。その橋がないと云うことが人間の交流をさまたげる非常に大きな原因になっていたと云うことに気が付いたのであります。これがだんだん橋が多くなければ現在最上川に50近い橋がかけられておりますが、しかも次々と橋がかけられるようになりつつありますが、それにも拘らず川向うとこちらでは非常に仲が悪い子供同志が非常に対立感情をもっているかいます。学校に行ってもなかなかその間の子供の感情の融和がとれないと云うふうの例をきく場合があります。

これは由良の例ですが、由良の海水浴場側と漁村的傾向をもっている海浜センターのある所よりもっと三瀬側による所になりますがその間を小さい川と云えない川があります。所が学校にかよっている子供が物の考え方や生活態度と云うものが違う点があると云うことを由良の小学校の先生からうかがいまして我々が案外気がつかない所にそう云う色々な問題があるんだと云うことをしみじみと考えさせられました。そう云う点をもう一つ赤川を例にとつて考えてみますと、赤川の左岸地帯と右岸地帯ではその部落の鎮守様の祭神を呼ぶ名前が非常に違う。そして祭神のご本家とされているお宮がかなり違う。例えば赤川の右岸地帯にまいますと新山神社がありますが、所が左岸地帯にまいますと新山神社と云うものがほとんどなくて河内神社、大里神社とか云う神社がある。この神様の基はどこかとだんだん探ぐって行くと左岸地帯の方は大鳥湖、大鳥の所に相模神社と云うお宮がある。この神社は曾我兄弟の仇討ちでうたれた工藤祐経の弟に工藤大学と云う者がおつてあの事件のあと鎌倉にしばらく新潟県にのがれ新潟県から大鳥部落に移ってきて大鳥部落の開祖になったと云う伝説があり、この

工藤大学が鎌倉から逃げてくる時に自分の家の氏神である相模明神をお守りしてきた。そのお宮が相模神社だと云うことで大鳥三部落がこれを氏神としている。この相模神社をご神体(ご本家)としている部落が非常に多い。所が右岸地帯の方に行くと湯殿山をご本山としてそれを新しく部落の開発の時に部落開発の守り神としてお祭りしたので新しい山の神社—新山神社と云ったと云われている例が非常に多い。これは赤川の同じ水系にあって農地開発にどうしても川の水が必要である。川を恵んで下さるその川を司さどる神様をその部落の鎮守の神様とするようになってくわけで右岸地帯は湯殿山を水源と考える考え方が非常に強い。左岸地帯は大鳥湖を水源として考える考え方が強いと云うことからそう云うふうなことになったんだと思われます。立岩部落あそこは朝日村になりますが、あの部落のそばに最近までふもとにありましたがその後山の上に移りました現在の赤川神社と云う立派なお宮があります。赤川神社のご祭神はダムになりました。八久和の部落の守り神とされています高安神社と云うお宮があります。これは高安山と云う山がありこの高安山の山の神を高安神社にお祀りしてあります。八久和がダムになって全戸移転の時にこの鎮守のお宮を中心にしてこの部落を去った者は年1度はここに集まってきてお祭りをしようではないかと云うことで東北配電でも非常に甚力して小さいけれどもかなり立派なお宮をたててそこに高安の神をお祀りしております。所がこの神様が赤川神社のご神体の基になると云うことで赤川流域では一つの違った例が出てきます。この赤川神社の氏子区域と云うのが非常に広い地域に広がっていて、かつては田川地区全域にわたって信者区域でありこの神社で春と秋に御札を配っていた。この御札は水の守り神様であり田の守り神様であると云うことで家々ではその御札が配ばられてくるのを待ちのぞんでいたと云うケースがあったのでした。これが赤川神社が山上にのぼり赤川水利組合がこの祭りに力を入れるそれと反対に氏子がこの神社の御札を余り受けようとしなくなった。こう云うふうな変革が起ってくるのも川の水に対する人々の考え方が変てきたと云うことと関係があるのではないかとそんな気がします。川の流域に色々な文化が栄えております。例えばこれは非

常に小さい川であります和名川地区—羽黒山の山麓から余目の方にかけての一体の所です。この辺にはこの川の流域に獅子踊—五匹の獅子が入りみだれて舞うと云う踊りが非常にたくさん残っております。所が川の左岸地帯と右岸地帯では獅子の頭の構造が違う。そして同じ様な獅子頭をかぶっていても踊り方が違う。そう云う例もあります。

そう云う例をだんだん探って行きますと私には川のもっている意味をもっと深く考えてみる必要があるのではないかと考えながらそこから荘内文化と云うものを考えてゆく手がかかりが得られるのではないかと。そう考えて最下研究を進めておる次第です。

1月2日の例会は休会です